

- 次男の出産 -

平成8年10月に次男を出産しました。

長男のときには、産後すぐに湿疹が出始めたので次男の場合も、日々肌の様子を気にしていましたが、明らかに肌を触ったときの柔らかさの違いを感じていました。

赤ちゃんの肌が、こんなにスベスベで柔らかくてポチャッとしていることを初めて知りました。

- 生後2カ月～5年間 -

生後2ヶ月目に入った頃、39度の熱が出ました。

検査の結果、「肺炎を起こしかけている」と言われ、入院することになりましたが、すぐに点滴をしてもらい、炎症も落ち着き、元気になりました。

しかし、このときから息子は風邪を引いたり、疲れが出ると扁桃腺が腫れて、39度の高熱が何日も続くようになり、その度に点滴で炎症を抑え、抗生物質を飲みました。

息子は、生まれたときから私や長男のアレルギー体質とは違い、きれいな肌をしていましたので抗生物質やステロイド剤などの薬を使用することにも比較的抵抗もありませんでした。

幼稚園に入園してからも、事あるごとに高熱を出し、点滴に抗生物質を服用しました。

生まれてからの5年間は、この繰り返しでしたがこのときまでは、いくら薬を飲んでも痒みが出たり、湿疹が出ることは1度もありませんでした。

アレルギー体質でもなかったので、食べることに特に気をつける物はありませんでした。

- 小学校入学～小学校2年生 -

小学校に入学してから、2ヶ月ぐらい経ったところ、また高熱が出たので病院に連れて行きましたが抵抗力も出てきたのか、点滴をする必要がなくなり、飲み薬だけで熱が下がるようになりました。

ところが、熱が下がると足の関節部分を掻き始める息子の姿が目につくようになり、いつの間にか身体にも湿疹が出始めていました。

それでも日にちが経つと落ち着くものだと思い、気にもしていませんでしたが、気付いたときには背中からおしりにかけて掻きむしり、汁が出るほどまでに悪化していました。

さらに、長男とは体質が違うからそのままにしておいても日にちが来たら自然と落ち着くものだと安易な考えでいました。

しかし、この考えが間違っていたと気づくまでには、それ程の時間はかかりませんでした。

日に日に、肌着と下着が肌にぴったりとくっつき、

「痛い・服がくっついて痛い」

「痒い・痒い」

「掻いて・もっと強く掻いて」

これまで息子には、アレルギー要素はない。と安心していただけに動揺しました。

そして、まさか私と長男がお世話になった先生に息子を診てもらいに行くことになるとは思ってもみませんでした。

それから先生を訪ね、息子が生まれてから小学校に入学するまでの体調について話をしました。

- 産後すぐに、黄疸がひどくて光線療法をしたこと
- 生後2ヶ月から、扁桃腺が腫れるたびに高熱が続くので、熱を下げるためにステロイド剤入りの点滴をして、抗生物質を飲んでしたこと

などを伝えると、

「小学生になって急に湿疹が出たのなら、環境の変化によってストレスがかかったり、薬でアレルギーが発症したとも考えられる」

と、言われました。

言われてみれば、息子は学区外の幼稚園に通っていたため、知り合いがいない、小学校に行き友達ができるのかどうか？と不安がっていました。

私にしてみれば、長男が同じ小学校にいるので安心していたのですが、息子にとっては、同年齢の友達がない環境の変化には、戸惑いがあったのかも知れません。

知らずしらずのうちに身体の中に蓄積されたものもあったのでしょう。

この後、2ヶ月ぐらいで痒みも治まり、出ていた汁も止まったので手当て（リンパマッサージ）には通わずに家で温泉パックをして保湿剤として馬油でケアをしました。

日に日に肌の調子も良くなり、2年生の頃には普通の肌に戻り安心していました。

- 小学校3年生～6年生 -

それから、3年生になり再び熱が出たので、病院へ連れて行き熱を下げるために薬を飲ませました。

ところが、熱が下がったと同時にまた、身体に湿疹が出始まりました。

確かに、薬の処方箋には発疹などの過敏症状が出ることもある。と、書いてありました。

この日からまた、痒みと闘う日が来ました。

この時期、学校ではプールが始まりましたが塩素消毒済のプールに入ると、傷口がヒリヒリ・チクチクしてプールから出た後、傷口が悪化するので泳がせることはできませんでした。

ただ息子はアトピーではなかったので、海に連れて行って海水療法も試してみました。

汗をかき痒みがでるのを防ぐためには息子の場合、海水に入ると痒みが落ち着き、肌の調子はよかったです。この後も度々疲れが出ると扁桃腺が腫れて高熱が出ました。

しかし、この頃から体力と抵抗力がつき始めたことで、熱が出てても自分で食事が食べられ、水分もとれるようになったことで、しっかり汗をかかせ着替えをさせることを繰り返すことで熱も早く下がるようになりました。

ただ、3年生の秋口からもまた、さらに湿疹がひどくなり始めました。

息子の場合、背中・おしり・手・足の関節部分に出始めました。

肌が柔らかいおしりは、掻きむしるために悪化が早く、汁でベトベトになり、痒みと痛みの両方が治まらなくなりました。それでも、昼間は学校に行っているの、気が紛れているみたいですが、夜中には、1時間おきにポリポリ・ポリポリ無意識の中で掻きはじめ、ポリポリが次第にポリポリ・ポリポリとひどくなり、掻くというより肌をむしり出す感じでした。

その度に、手を押さえ息子に掻かさないようにするのも一苦労でした。

この頃には、息子も

「何であんなにきれいな肌だったのにこんな肌になるのだろう」

と、疑問を持ち始め、

「もう、嫌だ」

と、腹を立てるようになりました。

私には、息子の気持ちが痛いほどよくわかりましたが、

「必ず治す・治る」

と、信じて強い意志を持たさないと自己治癒力は働かない。と、私は思っていますので、息子に

「きれいな元の肌に早く戻るために一緒に掻かない努力をしていこう」

と、話しました。

本当は、母親としては、

「無理しなくて、いいよ」

と、言ってあげられたらどんなによいかとも思いました。

でも、本当に治すということは、生半可な気持ちではできない。とわかっていたからこそ言えませんでした。

日常生活では、おしりから汁がポタポタと出ていたので学校に行くときにはパンツの中にハンドタオルを挟んで行かせていましたが、帰宅したときにはおしりとハンドタオルがくっついたまま剥がれない状態でした。

とにかく、おしりがひどいのでトイレにも息子専用の便座カバーを自分が持ち歩いていました。

息子は、生まれてから小学生になるまでは、とてもきれいな肌だったため市販の製品で使えない物はなかったのですが、この頃から自然素材の石けんなどにすべて替えました。

冬に近づくにつれ、昼間の痒みは落ち着き、学校から帰ったときに掻きむしった後も少なくなりました。

しかし、夜中の掻きむしりだけは無意識なので治まることはありませんでした。

私もアトピーだったのでわかるのですが、眠気とともに体温が上がり始めた頃、午前0時を過ぎた頃から次第に痒みが襲ってきて、掻いても、掻いても痒いところに手が届かないので止めることもできず掻きむしり続けました。

これ以上掻いたら汁が出て、ひどくなること。

掻かなかつたらきれいな肌になれること。

頭ではわかっているけど、掻き続けていれば痒い場所に手が届くと思いつつ掻いていました。

だから、寝てもボリボリと掻きむしっている音は聞こえているのでやめようと、思いながらも手を止められず掻き続けていました。

息子も同じ様に、午前0時を過ぎた頃から毎日掻き始めました。

本人に掻かせると悪化するほど掻きむしるので、掻き始めたら息子の手を抑えて私の手で掻きましたが、息子から「私の手が何本もあつたら一度に痒いところを掻いてもらえるのに」と言われたときには、さすがに堪えました。

毎日、午前5時ぐらいにようやく落ち着いて眠り始めました。

今夜は、ぐっすり寝ているから起きないだろうと思っても時間がきたら必ず掻きむしり、日が昇る頃には自然と手が止まりました。

3年生の頃からは、身体から出ていた汁も次第に落ち着きましたが、まだ温泉水で洗い流すと透明の水が白く濁りました。

4年生の頃からは、これまでとは違い地肌が多く出るようになりました。

5年生の頃には、元の肌に戻ることができましたが、それでもまだ夜中には時々掻いている音が聞こえていました。

しかし、ひどく掻きむしることはなくなりました。

6年生からは、まったく痒みもなくなり夜中の睡眠もきちんととれるようになりました。

- 中学生 -

中学生になり、クラブ活動でテニスができるほどになり小学生の頃よりも元気になりましたが、それでも年に一度ぐらいは扁桃腺による高熱が続くことがありました。

中3のときに高熱が出たのは、私の仕事の都合上引っ越し先で受験をすることが決まったときでした。

知らない土地での受験に戸惑い・友達と離れることの寂しさ・不安感からでしょう。やはり、精神的にも負荷がかかっているときでした。

そんなときには、息子と向きあって話し合いもしてきました。

- 高校生（現在） -

色々な出来事を乗り越え、現在、高校1年生(15歳)になり、新しい環境での新たなスタートが始まりました。

新しい生活に思っていた以上の早さで慣れてきた息子と当時を振り返ると、

悩みがあり、精神的にもストレスがかかっていたこと。

しかし、そのことから逃げることなく乗り越えたとき、自分も前向きに変わったこと。

色々問題はあったようですが、それらを乗り越えたとき自分の道が開けること。

私の方が教えてもらった気がしています。

今となっては、息子はアレルギー体質があったのか、なかったのか？

それだけが問題なのではなく、発症してしまったときにどう向き合っていくのか。

それを得ることも大事なことで知りました。

私自身のアトピー・長男のアトピーに引き続いて、次男のアレルギー発症のときにも母が全面的に協力してくれ、手当てのサポートと息子と私の心のサポートの両面を支えてくれました。

私にとっては、母の支えがあってこそ乗り越えられそれも特効薬にもなりました。

アレルギーと闘う本人。

それを支える人。

そして、その支えている人をまた、支えてあげられる人。

心、開ける人に傍に居て貰えると、心が折れることなく最後まで乗り越えられる筈だと信じております。

これからも一喜一憂することもあるかと思いますが、よくなったことも、悪くなったことも、まとめて伝えていければ考えております。